

ば供養すとも阿難等をば供養すべからずとなん。いかんがせんく。

第一の「有諸無智人」云者、經文第二の「惡世中比丘」、第三の納衣の比丘の大檀那等と見へたり。隨て妙樂大師「俗衆」等云云。東春云、「公処に向う」等云云。

第二の法華經怨敵、經に云、「惡世の中の比丘は、邪智にして心諂曲に、未だ得ざるを為れ得たりと謂い、我慢の心充滿せん」等云云。涅槃經云、「是の時に當に諸の惡比丘有るべし、乃至、是の諸の惡人、復是の如き經典を誦誦すと雖も、如來の深密の要義を滅除せん」等云云。止觀云、「若し信無きは高く聖境に推して、己が智分に非ずとす。若し智無きは増上慢を起し、己仏に均しと謂う」等云云。道しやく禪師が云、「二に理深解微なるに由る」等云云。法然云、「諸行は機に非ず時を失う」等云云。記十云、「恐らくは人謬り解せん者、初心の功德の大なることを識らずして、功を上位に推り此の初心を蔑にせん。故に今彼の行淺く功深きことを示して、以て經力を顯す」等云云。傳教大師云、「正像稍過ぎ已りて、末法ただ近きに有り。法華一乘の機、今正しく其の時なり。何を以て知ることを得る。安樂行品に云く、末世法滅の時なり」等云云。恵心云、「日本一州、円機純一なり」等云云。道綽と傳教と法然と恵心といづれ此を信べしや。彼は一切經に証文なし。此正法華經によれり。其上日本国一同に叡山大師受戒の師なり。何天魔のつける法然に心をよせ、我が剃頭の師をなげすつるや。法然智者ならば何此の釈を選択に載て和合せざる。人の理をかくせる者なり。第二の「惡世中比丘」と指るゝは法然等の無戒邪見の者なり。涅槃經云、「我等悉く邪見の人と名く」等云云。妙樂云、「自ら三教を指して皆邪

見と名く」等云云。止観云、「大経に云、此よりの前は我等皆邪見の人と名くるなり。邪豈惡に非ずや」等云云。弘決云、「邪は即ち是れ惡なり。是の故に當に知るべし。唯円を善と為す。復二意有り。一には順を以て善と為し、背を以て惡と為す。相待の意なり。著を以て惡と為し、達を以て善と為す。相待、俱に須く惡を離るべし。円に著する尚惡なり。況や復余をや」等云云。外道の善惡は、小乗經に對すれば皆惡道。小乗の善道、乃至四味三教は法華經に對すれば皆邪惡。但法華のみ正善也。爾前の円は相待妙、絶待妙に對すれば猶惡也。前三教に撰すれば猶惡道なり。爾前のごとく彼の經の極理を行ずる猶惡道なり。況觀經等の猶華嚴・般若經等に及ざる小法を本として法華經を觀經に取入て、還て念仏に對して闍拋閉捨せるは、法然並に所化の弟子等、檀那等は誹謗正法の者にあらずや、釈迦・多宝・十方の諸仏は「法をして久しく住せしめんが故に此に來至したまえり」。法然並に日本國の念仏者等は、法華經は末法に念仏より前に滅尽すべしと。豈三聖の怨敵にあらずや。

第三法華經云、「或は阿練若にあり、納衣にして空閑に在つて、乃至、白衣のために法を説いて、世に恭敬せらるること、六通の羅漢の如くならん」等云云。六卷般泥洹經云、「羅漢に似たる一闍提有りて惡業を行じ、一闍提に似たる阿羅漢ありて慈心を作さん。羅漢に似たる一闍提有りとは、是の諸の衆生の方等を誹謗するなり。一闍提に似たる阿羅漢とは、聲聞を毀皆して広く方等を説き、衆生に語りて言く、我汝等と俱に是れ菩薩なり。所以は何ん。一切皆如來の性有るが故に。然も彼の衆生は一闍提なりと謂わん」等云云。涅槃經云、「我涅槃の後○像法の中に於て、當に比丘有るべし。像を持律に似せ